

大気汚染 ドローンで調査

埼玉大など 西城で実証実験



大気観測の実証実験を前に、ドローンを調整する王教授（左から2人目）たち

埼玉大や環境ロボテイクス協会（東京）など森スキー場で、小型無質の発生源や飛来状況をつくる研究グループ「人機ドローン」によるドローンで調査する技術の確立を狙う。

同大学院の王青躍教授（57）は生物環境科同協会メンバーたちが、国土交通省大阪航空局などの許可を得て、標高約800メートルの小粒子状物質「PM2.5」などを計測できる装置をドローンに搭載。プロペラの影響を受けないよう、機体上部に長さ約80センチのパイプを取り付け、先端のフィルターから汚染物質を吸い込み、測定する手法を用いている。

この日は、王教授や同協会メンバーたちが、国土交通省大阪航空局などの許可を得て、標高約800メートルの小粒子状物質「PM2.5」などを計測できる装置をドローンに搭載。プロペラの影響を受けないよう、機体上部に長さ約80センチのパイプを取り付け、先端のフィルターから汚染物質を吸い込み、測定する手法を用いている。

王教授は「ドローンによる大気観測の技術が普及すれば、汚染物質以外にも花粉や原発事故に伴う放射性物質が、上空をどのように飛ぶか、即座に把握できる。より有効な環境対策も打ち出せるようになる」と強調した。

（山本堅太郎）